Salamander in the circle

第二十二章

物質化した太陽光線

峯村　明

Salamander in the circle

第二十二章の登場人物		
ダーヴェ	……	学術調査団の団長　上級賢者
ヒューダー	……	学術調査団の団員　民族・言語学者
イリチヤ	……	ヒューダーが名付けた少年
ヘルガ	……	エウメロス王国の王女
スクナ	……	世界の果ての島の王に仕える者
バイスロイ	……	黄金門の皇帝の息子
ヤスウ	……	学術調査団の団員
コモラ	……	メッサナ前総督の顧問　最高賢者
ソルド	……	ケストル人警備隊長

これまでの主な登場人物

ネウトラ評議会	ハイヤーン	本部科学者のリーダー
	ティコ	科学者
	ナシル	本部・事務職員
エウメロス王国	レル・ヴァリス	王室付近衛隊長
	ヴァリス将軍	レルの父
	カール	王子　ヘルガの弟
	ロウナス	国務省の高官
	アンテロ	レルの副官
	摂政	亡国王の弟
ケストル王国	パウル	国王
	ウルリク	第三王子
	ヘンリク	ウルリクの息子
	ホペオクー	ケストル人の美女
黄金門市	皇帝	皇帝
	パソネル	バイスロイの参謀
冥界	冥界王	冥界の王
	ペネトナシュ	死神
	テクトリ	最下層ミクトランの主
世界の果ての島	ホシナ	ホシナ族の族長　マミヤの父
	オマキ	ホシナの妻
	キト・コマ	ホシナ族の男たち
	ゴン	ホシナ族の男　（ヤサカオ族出身）
	サノヒコ	王に仕える役人
	アマセオ	シトリ族の後継者だったが追放された
	カガセオ	アマセオの弟
	ヤサカオ	ヤサカオ族の族長
	チドリ	アマセオの妻
	ハマツ	チドリの養父
	タマシギ	ハマツの実子
	オモイカネ	王に仕える者　日読み
	フツヌシ	王に仕える者　将軍
	ミツハ	メッサナから亡命後のメルノの偽名
メッサナ市	パンテオラ	メッサナ市の総督
	バラム＆バランケ	双子のジャガー　パンテオラの部下
	メルノ	音楽家
	バルダリス	メッサナ総督家の一人　臨時総督代理
	メンドルブ	メッサナ化学者集団の代表

目次

物質化した太陽光線
347.
348.
349.
350.
351.
352.
353.
354.
355.
356.
357.
358.
359.
360.
361.
back number
第二十二章のあとがき
奥付

物質化した太陽光線

347.

金の自然放射は、世界の原子構造のバランス保持、清浄化、活性化のエネルギーである。

金の中のエネルギーは実際、太陽から放射される電子力であり、極端に高く振動する。その影響はより微細、精妙な生命表現にのみ作用する。

人々はこの金属を普通に用い、そのとき精神的発展はきわめて高い状態に達する。こういう時代では金は決して貯蔵されず、大衆用に広く配給され、人々はその浄化エネルギーを吸収し、さらに偉大な完全さに上昇する。
『黄金時代』と呼ばれるこの時代において、最も取るに足らない用途は両替手段である。

『明かされた秘密・第二章』ゴッドフリー・レイ・キング

348.

　その晩遅く、コモラは一人でパルダリス邸の公邸と私邸とをつなぐ渡り廊下を歩いていた。公邸に集まった人々の間ではまだ話し合いが行われている。コモラは悩まし気なため息をつき、渡り廊下の柱の間から空を見上げた。
（……天の川か……）

　ふと、庭園の植栽の間を動くものがあった。星明りのなかに動物のシルエット。ジャガーだ。メッサナではジャガーはごく普通に飼われている動物で、パルダリスの広大な庭園でも数匹が放し飼いにされていた。彼らはよくしつけられていて、家人とそうでないものとを容易に見分けることができた。かつてのメッサナには犯罪者などいなかったから、番犬など必要なかったが、それでも飼い主に忠実なジャガーは愛らしくも頼もしい存在だった。

　そのジャガーはコモラのほうへまっすぐに歩いてきた。夜目にもつややかな黒い毛並み。琥珀色の瞳が灯火を反射して金色にきらりと光った。

＊

「ヤスウ！　これヤスウ！　これ、起きんか！！」
「はぁ～？　もう腹いっぱいですよぉ～　勘弁してください～　むにゃぁ～」
「なんだなんだマンガみたいな寝ぼけ方しおって！　小説に出演しているのだからそれ

らしい表現をせんか！」
「むにゃむにゃ」
「仕方ない、勝手に物色させてもらうぞ！」

　コモラはヤスウの寝室をぐるりと見回し、あちこちがさごそとかき回し、目当てのモノを見つけた。「あった！　これだ！」

349.

　斑（まだら）ジャガーのバランケがヒューダーとスクナの間を抜けて前方に走り出た。ふたりともけっこうな体格で、バランケの頭は彼らの腰くらいの位置、これまたけっこうな巨体である。それが足音もたてず、まるで風が抜けるようだった。

「なにか来る！」ヒューダーが低くつぶやいた。つぶやきながら膝まである長い上着の内側に手を入れ、出した時に握っていたのは革の鞭。細いなめし革を何本も丹念に編み上げたもので、コモラの力作である。

　なにが来るというのか。スクナは薄明の向こうへ目を凝らす。最初に気づいたのは視覚ではなく、匂いだった。（なんだこの――イヤな匂いは――）
そして、妙な気配。見ればバランケは立ち止まり、逆毛をたて、身構えるように頭を下げ体を低くしている。

　ヒューダーは「バランケ！」、と低く呼んだ。「伏せていろ！　貴公もだ！」
　スクナは逆らわずにすばやく伏せた。イヤな匂いも妙な気配もみるみる強まってくるのがわかったから。そして次の瞬間。

　ぶんっ！　という低い音が響いた。低くて重い、体に響く重量感のある音は、ヒュー

ダーが鞭を振るうことで生じた。鞭の先端が鳴る音だった。とたんに妙な気配がぴたりと立ち止まるのが感じられた。鞭はなお、ぶんっ！、ぶんっ！、となり続ける。
　前方の地面になにかが立ち上がった。立ち上がるというより、頭をもたげるといった方がいいか。
「蛇！？」
「そう。蛇だ」
「――でかい！　頭だけで一尺もあるぞ！　ヒューダーどの、あんなのに鞭は効くのか！？」
「さて。蛇は音に敏感だから、たいていのやつは威嚇すれば近寄って来ないんだが。こいつは――攻撃してくる――！　バランケ！！」

　ジャガーはいきなり跳んだ。助走もなく、いっぺんに四、五メートルも跳ぶ、魂消るような跳躍で、蛇に考える隙を与えなかった。襲いかかるやいなや、鋭い歯で頭部に噛みつき、のたうちぐるぐると絡みついてくる胴体を前足の爪で切り裂き、しっぽを後ろ足で蹴りつけて撃退する。蛇の運命はジャガーの最初の一撃で決まったようなものだった。が、死闘を繰り広げる二匹の向こうに――スクナは思わず怒鳴った。「もう一匹いるぞ！！」

　ヒューダーはたいして役に立たなかった鞭を引っ込め、ナイフを取り出していた。しかし投げつけるには距離がありすぎた。バランケが一匹目の相手を仕留めて次に取りかかろうとする前に、スクナは前へ出ていた。そして左手の拳を前方に突き出し、むん、と気合を放った。

350.

　バランケが噛みついた蛇に、血は流れていなかった。そしてスクナが倒したもう一匹とともにめらめらと青白い炎をあげて燃えてしまったのである。

「あれだけぷんぷんと生臭い匂いをさせておいて、血が流れておらんとはどういうわけだ！」
　嫌悪のあまり鼻の頭に皺をよせてスクナは毒づいた。バランケも口の中のものをぺっぺっと吐き出している。

「蛇は音で威嚇すればたいてい近寄ってこない。ここミクトランの蛇も今までそれが当てはまっていたのだが……」
「そうなのか？　えらく攻撃的だったぞ」
「誰かが、方針を変えたのかもしれん」

　誰かが――ちっ――と舌打ちしたようだ。しかし残念がっているようではない。むしろ――

　ヒューダーはゾクッと身震いし、それとなくスクナに目配せした。
（……）
（む？）
（名を、呼び合わんほうがいい。どうもいやな雰囲気だ。見張られているのかもしれん）
（そういえば。視線を感じるような……）

　ぱたぱたと軽い羽音をたてて小さなコウモリがバランケの頭の周囲を飛んでいる。口中をきれいにするのに余念がないバランケは顔もあげずに前足で叩き落とし、そのまま踏みつぶしてしまった。

　見るともなくその様子をみていたヒューダーは、とたんに雰囲気が軽くなったのを感

じた。

351.

　ベネトナシュはまたもや尻餅をついていた。
「お、おのれ〜〜今度はネコかー！　コウモリもコウモリだ！　なんだってそんな奴の近くへ行くんだ、バッカじゃなかろうか！！」
　さらにマヌケだの使えないだの役立たずだの飼い主の顔が見たいだの、さんざん悪しざまに罵られたコウモリは、半死半生、満身創痍の身を引きずって元の飼い主のところへ言いつけに行った。

＊

「ほーお？」

「催眠は甥っ子が得意だったのだ。見よう見まねでやってみよう」、とスクナが言い出したのである。バランケがいったん押さえつけたコウモリに催眠術をかけ、放してやったのだった。コウモリは元から受けていた命令通り、その目で見、耳で聞いたことをスクナにも送ってきたのだ。

「で、なにか収穫はあったのか、スクナどの」

「む。例のコウモリは大カラスと大ミミズクの間を行ったり来たりしている」

「大カラス……大ミミズク……」

「ヒューダーどの、心当たりでも？」

「大ミミズクはミクトランの主だ！」

「なんと！　大カラスの方は？」

「ぜんぜん、知らん！」

　ベネトナシュが聞いていたら青筋を立てたにちがいないヒューダーのセリフだった。

「ぜんぜん知らんが、倒した蛇が燃えただろ、あの後の、面白がっているような舌打ち、あれに既視感があるのだ……どこでだっけ？」

352.

　ヘルガは歩きながらずっと考えこんでいた。考えることは山ほどあった。が、ダーヴェではないが、考えたからといってどうなるものでもなかったが。

　バイスロイは彼自身気が滅入っていたところだったので、彼女もそうなのだろうと思った。冥界にいて滅入っている様子のないダーヴェたちのほうがどうかしていると思っていた。それで、普段の権力慣れして傲岸が板についている彼にしては珍しく、自分から口を開いた。「お疲れのようであるな。王女よ」

　ヘルガは、はっと面をあげた。「いえ、そのようなことはございませんわ」

　ダーヴェの結界の中はむしろ快適だった。湿度も気温も不快ということはまるでなく、そのうえ、そこにいると新陳代謝が下がるのだという。「あまりいいことではありませんが、空腹を感じずに済むんです」、とダーヴェは言った。時々結界を解いて歩くのは、人間には変化が必要だから、とも言うのだった。

「わたくし、地上へ戻ったときのことを考えていたのです」
　ヘルガは言う。
「わたくしの民は全員地下へ入りました。巨人族に国土を占領されてしまったからです。エウメロスだけでなく、そのような事態に陥った国々があるということです。あなたのおくにもそうなのでしょう？　ケストルを襲った災害はもとはといえば巨人族対策の余波のようなものですわ。ネウトラポリスも壊滅状態のようですし……世界はすっかり、変わってしまいました。ああ……地上へ戻る、そんなことはあり得ないのでしたね……」

「おそらく……そのとおりだ」

「地上は、巨人族のものになってしまうのでしょうか」

「控えめにいって、ありえない話ではない」

「……」

「黄金門の皇帝が『トゥランの七つの洞窟』を復活させようとしているのは、それを見越してのこと。人間が巨人族に勝つ方法はないのだ。よしんば、あったとしても、それは地上世界を破壊してしまう。評議会が造ろうとしていた原子爆弾然り、五万年前に使われた劇薬然りだ。あるいはそれらの破壊的方法で地上世界と巨人族を道連れにし、人

間は地下で生き続けるか」

　あっ、とヘルガは顔をあげた。「もしや、バイスロイさま。あなたがたはその破壊的方法というのをすでにお持ちなのですか！？」そのために、地上世界の破壊と巨人族殲滅のために、私たちは地下へと誘導されたのかという考えがヘルガの胸中を過ぎった。

　しかしバイスロイはきっぱりと首を横に振った。「そんなものはない！」、と。
「『トゥランの洞窟』復活は最後の手段だったのだ。地上の住人を救うために考え得る、唯一の道なのだ！」
　彼は苦渋の表情を隠そうともしなかった。「それは本当のことだ。そなたが信じようと信じまいと、本当のことだ。黄金門市とはキングオブキング。王国の中の王。その使命は民を導くことである！」

　きっぱりと言い切るバイスロイの横顔を、ヘルガはぼう然と見つめた。

353.

　手分けしてミクトランの探索を行っているヒューダー組とダーヴェ組は合流して一ヵ所に集まり、結界の中に入る。そこで状況と成果を報告しあうのだが、今回、ダーヴェは珍しくまじめな顔で緊張していた。彼は言った。「バラムが戻ってきました」

　黒ジャガーはたくさんの荷物を携えて戻ってきた。ほとんどは食糧である。パンや果物、飲料水が革の袋に詰め込まれ、胸に括りつけられていた。そして――「ダーヴェ先生！　それは！」ヒューダーは思わず師の顔に指を突き付けてしまった。

「ええ、バラムが持ち帰りました。このメガネ、ヤスウがもってたんですよね？　最新の情報が入っていました。私が知る限り、こういうことができるのはコモラさんくらい

です」

　ダーヴェはすっかり癖になっている仕草でメガネを押し上げた。

「メッサナはちょっとたいへんなことになってますよ……」

　こうして一行はアンベレオ王のメッサナ行幸のニュースを知ったのだった。

＊

　メッサナの封鎖は段階的に行われた。まず地上の交通が止められ、空の交通が止められ、それら、物理的なもの、自然に関するもののあとに、瞬間移動、遠感など、メタ次元で行われるあらゆる行為が不可能になった。
「事前の通告はなかったそうです。気がついたら出入りできなくなっていた。ただ、それにいち早く気がついたのが『化学者の館』だった。あそこにはさまざまな計測器械がありますからね、メタ次元の数値異常に気がついた」

　ヤスウが評議会のナシルと繋がることができたのは、『化学者の館』にいたおかげだったのだ。

「アンベレオ王がメッサナを訪問するにあたって、その場にいる全員を閉じこめたと考えられます」

「なぜそんなことを？　そこまで念入りに、徹底的に、人々を閉じこめて、いったいどうしようというのだ！」
　ふだんは泰然と落ち着き払っているヒューダーだったが、さすがに雰囲気がきな臭くなってきた。メッサナには師コモラが、ヤスウが、そして、マミヤがいるのだ。

「祭司長が全員に祝福を与えたいのだそうです」

「……」

354.

　ダーヴェはどこからともなく地図を取り出した。世界地図である。全員にみえるように、それを空中にぺたりと貼りつける。
「赤い印は巨人族に襲われた都市です。襲われていない都市もあります。緑の印です。さあ。なにかお気づきのことは？」

「エウメロス王国、黄金門市を含むアトランティス大陸はほぼ全域が襲われているな。海峡を隔てたネウトラポリスは例外なのか」

「ええ。巨人族は海峡を、海を渡ったのではないとわかります。超自然的な方法で送り込まれた。あまり役に立ってはいなかったとはいえ、多くの権力が集中していましたから、とにかく潰しておきたかったのでしょう。黄金門市も然り」

「潰しておきたかった？　いや、ダーヴェ先生、そんなことをしたいのは誰だ？　巨人族はほぼ確実に人間も、人間が造ったものも滅ぼしてしまう。後に残るのは肉食の巨人だけだ。彼らが数千年、数万年生き延びることは歴史が証明している。そんなことをしたいのは誰だ！？」

　ヘルガは思い出した。誰かが世界を弄んでいるのだという、スクナの言葉を。

「少なくとも、ミクトランの転送ステーションを自由に操作できた者でしょう。やりすぎてステーションは壊れてしまいましたがね」

　ダーヴェはいったん間を置き、
「この緑色の印についてはどうですか、ヒューダー」
「アトランティス大陸のずっと東にある、新興国？　ちょっと待て……それは……アンベレオの植民地ではないか？」

「そうなんです。アンベレオの息のかかっていない都市はひとつもない」

「つまり――アンベレオだけは巨人族の災厄を生き延びることができるというのか！？」

　ダーヴェはうなずき、メガネを押し上げた。
「これらの都市はすべて商業が盛んな地域、商取引で互いに栄えている国々です。コモラさんがおもしろいデータを送ってくれましたよ。メッサナの封鎖が物理的次元で始まったとたん、これらの都市で貴金属が値上がりし始めたというのです。大元から品物の移動ができなくなって品薄になったのだから当然ですね。今では高騰してるのではないでしょうか」

「まさかアンベレオは貴金属を投機の対象にしようと！？」

「おそらくそういうことでしょ」

「――バカな――」

355.

「金の自然放射とは、世界の原子構造のバランス保持、清浄化、活性化のエネルギーな

のです。

　金の中のエネルギーは実際、太陽から放射される電子力であり、極端に高く振動し、その影響はより微細、精妙な生命表現にのみ作用します。

　人々はこの金属を普通に用い、そのとき精神的発展はきわめて高い状態に達します。こういう時代では金は決して貯蔵されず、大衆用に広く配給され、人々はその浄化エネルギーを吸収し、さらに偉大な完全さに上昇するのです」

　皆の中央に立つダーヴェはメガネを押し上げながら講義した。皆は夢見る思いで耳を傾けている。そしてヒューダーがあとを引き継ぐ。

「『黄金時代』と呼ばれるこのような時代において、最も取るに足らない用途は両替手段である。

　……まさに……メッサナは黄金時代を象徴する都市だったのだ。が、どうやら、終わったようだ」

「それも、外部から干渉されたり攻撃されたわけではありません。かつてメッサナはそんなものはいっさい受けつけなかった。きわめて高い精神性がメッサナから放たれていた。攻撃こそが最大の防御といいますが、防御など必要なかった。しかし……内側から崩れるという道があったとは……」

「私は少年時代をメッサナで過ごした」

　問わず語りに語りだしたのはバイスロイである。組んだ指のなかに鼻先をうずめている。

「じつにさまざまなことを学んだ。興味のあるものはなんでも学ぶようにと父から勧められていたので、それこそなんにでも手をだした。演劇、音楽、舞踊、絵画、彫刻、詩、弁論……教授も仲間も施設も、申し分ない、素晴らしい環境だった。そこで私はいっぱしの文化人になったつもりだった。しまいには世界中を旅し、人々の暮らしのなかをも垣間見、やはり政治を学ぶ必要があると思い、留学延長の許可を得るためにいったん故郷へ戻った。そこであの事件に遭った……
メッサナでの日々はまさに私の黄金時代だった。演劇と音楽をもっと学びたかったので、仲間といっしょに劇場支配人の屋敷に居候し、屋敷の一画で明け方まで議論をし、練習をしたものだ。我々が練習に勤しんでいると支配人の末娘がやってきて、いっしょに歌をうたった」

　バイスロイの脳裏には金髪に金色の肌の、人形のように愛くるしい少女の姿が浮かんでいた。

「われわれは市場の広場や公園でパフォーマンスを行い、時には居合わせた人々と時間を忘れて楽しんだ……懐かしく……輝かしい……あのメッサナが……二度と戻らないとは……」

　肩に柔らかな手を感じる。慰めるように肩に置かれたのはヘルガの手だった。バイスロイは思い出を振り払うようにきっぱりと顔をあげた。

「いや。つい話の腰をおってしまった、先を続けてくれたまえ」

357.

「――メッサナの音楽学校の生徒が住民に迫害された。そのことが引き金になったのは間違いありません。本家のアンベレオがいきなり総督府に乗り込んできた。それから雪崩をうつように、メッサナの繁栄は一変してしまった」
　ダーヴェの口調は重い。
「アンベレオ王家が音楽生事件に乗じたのか、それとも、乗り込むために作り上げた事件だったのか、それはわかりません。確かなことは、アンベレオの行動がひじょうに迅速だったことです。事件後、アンベレオは強引に総督府に入り、統治責任を負う関係者を一掃していき、刑を執行した。その迅速さ、苛烈さは住民に多大な衝撃を与えた。
　それはあまりにすばやく、徹底的に行われたので、アンベレオに異を唱える間もなかった。発端は音楽生事件という奇妙な出来事にあり、住民の多くはひとりの女学生の迫害に手を染めていたと彼ら自身が認識していることから、罪の意識と恐怖に染まってしまった――」

「音楽学校の生徒が？　迫害された？　――誰？」
　バイスロイの顔から血の気が引く音が聞こえるようだった。彼はほんの数年前までメッサナの芸術関係者と交流があったと自ら語ったばかりだった。

「お知り合いかもしれないのですね。わかりました、後ほどお教えしましょう。ひとまず、こちらの話を優先させていただきたいのですが」
　ダーヴェは静かに言い、バイスロイは聞き入れて引き下がった。

358.

「総督府議会は現在半数にまで減り、前総督の実弟、パルダリス氏が臨時の代表となっています。コモラさんはパルダリス邸でバラムに逢ったのでした。そしてこれが――パルダリス氏宛てにアンベレオから送られてきた文書の写しです」

　ダーヴェは世界地図とその文書とを差し替える。アンベレオからの書にはこうあった。

『王陛下の行幸に伴い、メッサナ市民全員の歓迎を期待する。また、当市に滞在中の旅行者、外国人は滞在を延期されることを王陛下は希望している。同行される祭司長が当市のすべてを祝福されるためである。メッサナ全市民、旅行者、外国人すべてがこの栄誉を受ける資格をもつものとする』

「王と祭司長がメッサナを訪問する、と言っているのですが……これまでの経緯からして、今のメッサナには受け入れる以外の道はないでしょう。総督家は反発していますが、肝心の市民の多くが自分らのしたことに罪悪感を持ち、アンベレオの強硬さに恐怖を持ってしまっていますからね。総督家としてはアンベレオを強引に突っぱねるわけにいかない。下手をしたら市民らが総督家に反発しないとも限らないわけですよ。アンベレオは市民を害しに来るとはひとことも言っていない。それどころか、祝福する、というのですから」

「ダーヴェ先生。自然な成り行きでそんなことになるものだろうか？」
　ヒューダーの皮肉な口調に、ダーヴェは両眉を持ち上げ。肩をすくめて応じた。

「そしてですね、問題はここからなんです」

　文書が再び差し替えられた。

『行事にさきがけ、王家は市民に対して、充分な食糧と生活物資、及び娯楽を提供する。また、滞在中の外国人、旅行者に対しては行事まで滞在を延期するという不便を補うため、より手厚い保護が用意されている』
　と、それには書かれていた。

359.

「至れり尽くせりだな」ヒューダーは腕組みして笑った。「いやな予感しかしないぞ」

　ダーヴェは真剣な面持ちでうなずいた。「そういう印象を持ったのはヒューダー、あなただけではありません。パルダリス氏も、コモラさんも、これにはひじょうな危機感を抱いたようです。例の事件で市内のホテルやアパートは物騒だと思った人たちがパルダリス邸に駆け込んで来ているので」

「なにものも見逃さない、か。まるで神の目だな」

　ヒューダーは文書の続きに細かく記された部分を目で追っていた。
「十二分な居室、十二分な食事、十二分な衣服、十二分な娯楽……これが王の行幸完了まで続く、だと？　まるで……」王侯貴族の生活ではないかと言いかけて、口をつぐむ。目の前に本物の王侯貴族が少なくとも二人いる。

「まるで、特権階級の扱いですわね」ヘルガがさらりと引き継いだ。そして、「そこまでする理由はなんなのかしら」

　ダーヴェはヒューダーを見やったが、ヒューダーは頭を振った。が、ふと思いついたように、「イリチヤ、おまえだったらどう思う？　つまりだな、腹は減ってひもじい、横たわる場所もない、身に着けてるものもぼろぼろ、面白くもなんともない毎日……そんな時にこんな申し出を受けたら……あぁ。おまえはそういう目にあったことはなかったんだった」

　イリチヤは食べかけのパンを呑み込み、憤慨した。「失礼しちゃうな！　ぼくはなんの苦労もしてないっていうの？　ぼくは見かけほど育ちも良くなければ、上品でもないし、頭の出来だって良くないんだぞ！」

「……何を言いたいのかよくかわからん。もうちょっと整理しろ」

「つまりね！　ぼくはヒューダーが知らない苦労をいっぱいしてるってことさ！　っとに！　見た目で判断しないでもらいたいよ！！」

「見た目で判断しているつもりはないんだが……すまなかった、謝る」

「わかればいいんだよ、誰だって過ちはあるもの、許してあげる。それで、さっきの話、なんだっけ？　ああ、とにかく、うんっとぜいたくさせてくれるっていうの？　ぼくだったらおことわりだね」

「……どうして」

「だって、タダほど高いものはないっていうじゃないか！　ぼくは自分のごはんは自分で捕まえる！　じゃなくて、探すね！」

　スクナの脳裏にせっせとエサを漁っているイモリの様子が浮かんで、ふき出すまい

と、けんめいにイモリを視野から追い出した。

360.

「まあまあ。さいごまでよく読みましょう。えーと……『衣食住は最高水準のものが提供される。この措置を受ける者は王の行幸を歓迎すべく、市内の雰囲気を盛り上げる義務がある』……」

「なんだって？」ヒューダーはいやそうに顔をしかめた。「お役所言葉ってのはよくわからん。なんだっていうんだ？　とヤスウなら文句を言うぞ」

「まったくですね。つまりこういうことです。モノは提供するから王様ご一行を思いきり歓迎しなさいと」

「勝手にやってくるというのに、歓迎しろ？」ヒューダーはますます顔をしかめた。佳い男ぶりが台無しである。「それも市民にではなく、市民以外の滞在者への要求だろう？　メッサナ市はあらゆる意味で封鎖されていて、外へ出ることもできなければ助けをよぶこともできない。閉じこめておいて歓迎しろとは。アンベレオはいったい何を考えているんだ？」

「ヒューダーはメッサナ市封鎖はアンベレオによるものだと考えているのですね？」

「……そう言ったのは先生ではないか？」

「アンベレオ王がメッサナを訪問するにあたり、と言っただけです。実行者が誰なのか、私にはわからないのです。いえ、初めて知りました。メタ次元を封じ込めるという

技術の存在を」

　ヒューダーはあっけにとられた。「上級賢者にならできるんじゃないのか」

　ダーヴェは頭を振る。「私にはできません。コモラ先生にもできない。少なくとも私の知るかぎり、だれにもできないんです。考えてもみてください、そもそもそんなことができるなら最高賢者コモラがとっくに解除してますよ」

　ウソだろ、と、ヒューダーは口の中でつぶやいた。

「ひとつ、気になることがあります。アンベレオの祭祀長です。アンベレオもメッサナも崇拝の対象は同じ、金星です。しかし金星神が行幸に際して歓迎を要求するなど、たえて聞いたことがない。ですから……」

「金星ではないものと……手を結んだ……？」

「そうです。そしてその場合、行幸歓迎イベントはなにかとんでもないところへ行きつくのではないかと、それが心配なんです……」

　と、そのとき。

　はっと、ダーヴェが気色ばんだ。「なにか来たみたいです――！」結界の外でバランケが不穏な唸り声をあげているのが聞こえてくる。結界の内と外の境界は分厚い水のようなエネルギーで、不透明な壁。その壁の向こうに複数の人間の姿。それからバランケのシルエット。

「――誰だ――新しい進入者――？」

361.

「俺だ」

「――ソルド！？」

「やあ。ひさしぶりだなあ、ヒューダー」

「ああ……まあ……無事でなにより」

「今日はお別れを言いに来たぞ」

「――どこかへ移動するとでも？」

　ソルドは、にっ、と笑い、ごつい人差し指を立てて見せた。

「――？」

「上だ、メッサナ市」

第二十二章『物質化した太陽光線』

第二十三章へ続く

back number

第一部

『第一章　世界の果ての島』
はるか昔、ホシナ族の祖先は北方の故郷を出て南を目指した。長い旅の果てにたどり着いた島で、黒曜石の鉱山を得る。しかし、黒曜石の採石、加工、使用、すべて島の『王』の特別な許可によるものだった。
ある日、ホシナ族のもとにふたりの異国人がやって来た。ネウトラ評議会・学術調査団を名乗る彼らの目的は、絶滅危惧種である巨人族の調査だった。

『第二章　破滅の襲来』
調査行の最中に調査団長・ダーヴェとホシナ族の娘・マミヤの行方がわからなくなる。やはり行方不明の巨人と同様、何者かに拉致されたと考えた調査団メンバーのヒューダーとヤスウは島を後にし、ダーヴェたちの痕跡を追う。航行中の彼らは緊急事態信号をとらえ、発信元のエウメロス王国へ急行する。

『第三章　変態』
エウメロス王国を襲った巨人族はどこから来たのか。ヒューダーはエウメロスのレルを伴って隣国ケストル王国へ。両国の国境をなす険しい山脈のふもとに作られていたのは王家の離宮と闘技場。ひとりの少年を密入国させたかどで、ヒューダーは闘技場に引き出される羽目に。決闘の相手は当の少年。この闘技場が巨人族のホームだと直感したヒューダーだったが、己がイリチヤ（槍）と名付けた少年に倒されてしまう。
※・サブタイトルについて。
オタマジャクシがカエルに、イモムシが蝶に形態が変わるという意味での『変態』です。別の意味ではありません

『第四章　レムリアン・ラプソディ』
ケストルの闘技場でマミヤから渡されたダーヴェの眼鏡には、夥しい量の情報が納められていたことがわかる。それは巨人族の遠い祖先の濃密な記録だった。マミヤに眼鏡を託したダーヴェは南へと向かったらしい。世界の果ての島で仕切りなおしたヒューダーたちは、マミヤ、ヘルガ王女、ダーヴェの探索、そして巨人族の襲撃に遭ったネウトラ評議会本部へ向けて、それぞれ旅立つことになる。

第二部

『第五章　メッサナ』
エウメロス王国はヘルガ王女を取り戻すため、帰国したレル、黄金門市のバイスロイと共に動き出す。王女返還の申し入れを受けたケストル王は、王女にかかっていた魔法を解いて求めに応じるが……

一方、ヒューダーはイリチヤを伴ってメッサナ市に入る。メッサナは総督パンテオラが統治する巨大な石造都市にして知と美の殿堂である。ヒューダーの上司ダーヴェはここを訪れ、巨人族の謎を追ってジャガーのバラムと共にすでに立ち去っていた。ヒューダーはバラムの双子の弟バランケに先導させ、ダーヴェの後を追う。

『第六章　脱走巨人』
ヘルガ王女を乗せたエウメロス機はケストル機に襲われる。コタエと駆けつけたイリチヤとによって全員エウメロス領側に助け出されるが、そこには巨人が待っていた。コタエたちに襲いかかろうとする巨人をイリチヤが阻止するが、それはエウメロスの首都へ派遣された増援部隊から脱落した者だった。搭乗機を破壊され、国境付近の険しい高山にとり残されて身動きできない一行はそこで一夜を明かすことになる。そして夜半。レルはコタエに異変が起こっていることに気づく。

『第七章　メッサナからの逃亡』
知と美の殿堂メッサナで音楽家を志し、歌で多くの人々を魅了したメルノ。ある日突然、メルノに心酔していたはずの人々が当のメルノを攻撃し始める。悪意に満ちた激しい攻撃を見かねた人々は彼女を助けようと進んで支援するが、メッサナ郊外でメルノはひとり放置されてしまう。後戻りもできず湿地帯へと踏み込んだメルノは、幻を見、神と名乗る者と言葉を交わす。
同じころ、ヤスウはネウトラ評議会本部を発ってメッサナを目指していた。

『第八章　IRITIYA』
人々に多大な影響を及ぼす力を秘めた芸術家を見出し、恐怖の中に放逐する。冥界の王が白羽の矢を立てたのが音楽家メルノだった。王は部下のベネトナシュを使ってメルノとメッサナの人々とを恐怖に陥れようと画策していたのだった。メルノは死んだと報告するベネトナシュ。だが冥界の王はひそかにそれを疑う。
一方、イリチヤとマミヤとは、エウメロスの首都へ向かうレルらと別れ、メッサナ市を目指す。が、メッサナ総督府には異変が起こっていた。イリチヤは外部の隠れ家に潜んでいたコモラを探し出し、パンテオラ総督がアンベレオ本国の兵士に連れ去られたことを知る。

『第九章　原子の火』
のちの世に黄金郷と呼ばれるものを、メッサナ市は持っていた。総督家の本家筋にあたるアンベレオ王家は、拘束したパンテオラの身柄と金脈とを引き換えにしようと画策を始める。パンテオラの代理を務めることになったパルダリス氏は本家の要求に激怒、そんな中、ネウトラ評議会がメッサナが抱える化学者の協力を要請してきた。評議会は巨人族侵攻対策のために原子炉を造ろうとしている。
メッサナの化学者の長メンドルプは、それを知って震撼する。
2011年の原発事故を踏まえた『火精霊に聴く　-原子の火に関する一問一答-』を収録しました。

『第十章　二極世界』
死神はメッサナの金脈がアンベレオの手に渡ることを好まない。その思惑は、アンベレオ王家とメッサナ総督家との全面的対立へと向かわせる。それは多くの物資をアンベレオ王国に依存する諸国と、知と美をメッサナから持ち帰った各国の人材たちとの対立へと発展する様相を見せていた。また、メッサナ化学者集団は巨人族対応を巡ってネウトラ評議会と対立する。

ヒューダーの要請に応じるイリチヤの旅立ちをひとりで見送るヤスウ。
並外れた知と美の都の凋落が、ヤスウの目の前で始まろうとしていた。

第三部

『第十一章　天津甕星』

黒曜石に携わる人々・ホシナ族は原住の民ではない。若い兵士アマセオは、昔、星に導かれてやってきたというホシナ族に親しみと興味を覚える。
ホシナ族と交わるうちに美しい青緑色の幻獣を見かけ、ますますホシナの地に惹かれるアマセオだった。
そんな中、アマセオの実家の使者がやってくる。使者が持ってきた知らせは、アマセオの妻に子どもが生まれたというものだった。族長夫人のオマキは大喜びするが、アマセオは激しく動揺する。生まれた子は三つ子。アマセオ自身も三つ子だった。それは生まれてはならない者だったからだ。

『第十二章　機織り族の野望』

王に献上された見事な織物。かつて王の正后に贈られた腹帯と同じ材質のものに見えたオモイカネは、それに触れたとたん、激烈な反応を体験する。現政権の日読みを司る彼は、王に危害が及ぶ懸念からその織物を預かる。
一方、赤子と妻に会うため、帰郷したアマセオ。故郷は鳥を守護神とする神聖な織物の郷。妻の兄、タマシギと語り合ううち、タマシギが一族の持つ織物の権利の維持と織物の技術開発に並々ならぬ意欲を持っていることを知る。家を追い出され、家業に興味のないアマセオだったが、タマシギに対して違和感を覚える。そんななか、アマセオの子が怪鳥にさらわれる事件が起きた。

『第十三章　アマセオとカガセオ』

鳥の化け物がシトリを襲い、三つ子を連れ去った。三つ子の父親・アマセオは化け物を追う。
シトリ一門の将来について、追放同然とはいえ嫡男であるアマセオと考えが食い違うことに気づいたタマシギは、この事実を即刻政庁に報告する。
報告を受けたフツヌシは、アマセオがかねてよりホシナ族と接近していることを懸念していた。
この国の仕組みは北極星を中心としている。一方、はるか過去に石器と狩りの技法と共に北からやって来たホシナ族は金星に導かれていたからだ。しかしこの国にとってホシナ族はなくてはならない存在であることがフツヌシを悩ませる。
アマセオの子をさらったのは、出生後に殺されたはずのアマセオの弟だった。弟はシトリの後継者であるアマセオの力になるべく、殺された後タマシギに憑依し、シトリを導いてきたことを告白する。
ところが、タマシギの目的のためには手段を問わない強固な性格は、得体の知れないモノを深淵から呼び込んでしまった――

『第十四章　ヤサカオ　立つ』

ホシナ族の黒曜石事業拡大は政府から仕掛けられた罠だった。権利の拡大解釈を理由に、政権の軍部を司るフツヌシはホシナ族を討つべく行動を開始する。フツヌシはまた、アマセオを陥れる訴えをもタマシギから受けていた。

夜陰に紛れてホシナ族の地を訪問したスクナは、アマセオにすぐにこの地を離れるよう進言する。フツヌシの狙いを攪乱するためだった。そしてスクナは、タマシギに憑依したカラスの正体を知る。ミツハの中のメルノは言う。それは死神だと。
死神の登場に動揺したメルノはホシナ族を抜けようと考えるが、スクナから厳しい叱責を受けるのだった。

一方、アマセオと懇意の仲のヤサカオは、ひとつ問題を抱えていた。ホシナ族を存続の危機に陥れ、ホシナの娘マミヤ失踪のもととなった事件を起こしたゴンはヤサカオの息子だった。族長ホシナがゴンをホシナ族の者として扱ったため、ヤサカオの名は表沙汰にならなかったのだ。そのことを恩義と受け取ったヤサカオは、ホシナ族にかわってフツヌシを迎え撃つ。

『第十五章　ふたつの北極星』
かつて名を奪われ、取り上げられたわが子が意外にも近くにいると知ったミツハは彼女本来の力を取り戻し、カラス−死神と対決する決意を固める。
一方、フツヌシの軍団のひとつが農村を襲って村人を人質にホシナ族に投降を迫り、ホシナの郷をも襲おうと謀る。ホシナ族はもはや退路は断たれたと知り、そのやり方にアマセオは失望と怒りを覚え、フツヌシ、オモイカネに政府の真意を問いただす。
オモイカネは、現王の後継者を巡って政府内で陰謀が渦巻いていることを語る。王と深い関係にあるホシナ族は陰謀の犠牲になり、ヤサカオ族と共にフツヌシを負かしたアマセオは王位を巡る者にとって脅威的な存在になっていたのだった。
はたして、ホシナ族とアマセオの行方は。

第四部

『第十六章　トゥランの七つの洞窟』
冥界王に無断で世界の果ての島に手を出した死神は冥界王の怒りを買い、ついに見放される。
一方、ケストルの追撃を逃れた王女ヘルガはついに故国に帰還。信用のおける側近らと情報を交わすうち、ネウトラ評議会が巨人族の襲撃を受けて壊滅状態であること、また、メッサナ市に異変が起こり、封鎖されたことがわかる。そんななか、エウメロスの地下シェルターに逃れてきた黄金門市の皇帝は、エウメロスの生存者全員を地下シェルターに収容し、ひとつしかない入り口を塞ぐことを提案する。大陸の下には遠い過去に造られた巨大な都市があり、エウメロスの地下シェルターはその都市から伸びた枝道のひとつだった。皇帝の一族は驚異的な力をふるって地下道掘削に取りかかる。

『第十七章　ブルー・マーキュリー遭難』
巨人族を殲滅させるべく原子炉製造に意欲を燃やすティコ博士に頼もしい協力者が現れた。評議会西支部のコパーン博士である。メッサナ化学者団と決裂してしまったティコは、コパーンの進言を取り入れ、原子炉から原子爆弾へと舵を切っていく。その様子を耳にした黄金門の皇帝は、評議会には専門家がいないのだと見抜く。いずれにしても地下へ潜ってしまったエウメロスには無関係なことだと思われた。ところが事態は急変する。コパーンがティコへ送った無人偵察機が行方不明になった。偵察機は爆弾の製造仕上げに使うブルー・マーキュリーという素材を掲載したまま、ケストル北方、氷河地帯でコントロール不能になったのである。ケストル王国が遠い昔、氷河の決壊によって洗い流された原野に建設されたことを知ったヘルガはケストルに留まっているバイスロイ救出に動き出す。

『第十八章　王女の冒険』
ケストル王国に向かったスクナとヘルガは、途中、アマセオと出会う。彼はホシナ族と行動を共にしてきたが、ホシナ族が安全な場所で逗留中、単独行動をしていたのだった。スクナらが大任を負っているのを知り、アマセオはケストル北方へと偵察にむかう。
ケストル王パウルと対峙し、国民らに避難を呼びかけたヘルガはバイスロイが王都にいないことを知る。彼は離宮へ招待されていたのだった。ヘルガにはおぞましい記憶の残る場所だったが、バイスロイ救出に急行する。しかし王都よりずっと北にある離宮は決壊した氷河に呑まれようとしていた。

『第十九章　ミクトランへの道』
ケストル闘技場からエウメロス地下シェルターへ移されたアマセオ。レル・ヴァリスは彼自身が保管していた闘技場の見取り図とアマセオが持ってきた情報が一致していること、そしてかつてダーヴェのメガネを解析したコタエの記憶から、ケストル闘技場には巨人族が出入りしていた機構があることに気づく。一方、破壊されつつある闘技場地下にある渦に飛び込んだバイスロイらはどことも知れぬ場所に到達。バイスロイは到達地の特徴から、それが太古に失われた転送システムであると知る。

第五部

『第二十章　冥界の巨人』
バイスロイ一行を出迎えたのは、ネウトラ評議会のダーヴェ。ダーヴェはケストル闘技場から転送システムを使ってミクトランへ来たのだった。同じ方法で多くのケストル人がミクトランにやって来ていた。いくつもの事情で母国へ帰れなくなったケストル人は、ダーヴェらをつけ狙った。彼らは、転送システムのパスの機能をもつ『評議会の身分証』をもたらした人間、ヒューダーをも恨んでいたのである。地上帰還の可能性がきわめて低いなか、ダーヴェたちは最大の謎、巨人族がどこからやってくるのかを解こうとしていた。

『第二十一章　メッサナの黄金郷』
ヒューダーとスクナとはホシナの郷について、イリチヤについて情報を交換し合う。スクナはその見た目からメッサナからの逃亡者メルノはイリチヤの身内ではないかと考えていた。しかしヒューダーは納得できない。メッサナ人とイリチヤとでは外見の特徴が違い過ぎるからだ。
かつてメルノは、その名の者は死んだとし、偽名として自らミツハと名乗った。そのことを知ったヒューダーは、『ミツハ』とは水の精霊を表す音であると気がつく。古い伝説によればイリチヤの母親は水の精霊である。
一方、メッサナ滞在中のヤスウとマミヤは総督代理パルダリスのもとに身を寄せていた。そこへメッサナの本家アンベレオの王、行幸の通達が届く。それは国王の行幸完了まで現在メッサナ市にいる者はその場を動いてはならないという命令でもあった。

第二十二章のあとがき

今回、冒頭で引用したのは『明かされた秘密』（ゴッドフリー・レイ・キング著）からでして、St.ジャーメインによる言葉です。

金の存在目的とは、世界の清浄化、活性化、原子構造のバランス保持、それ自体のエネルギーの開放であって、それ以外の使用は、まあ、道から外れている、と。
かつては誰もが手にすることができたし、日常的に触れていても害になることはなかったといいます。
St.ジャーメインの語る話の中には黄金や宝石をふんだんに使った輝かしい文明がアフリカや南米に登場しますが、そういった文明もある日突然消えてしまい、伝説の中に非現実的な夢物語のようにしか残っていない。いかなる文明も例外なく道を見失い、堕落が始まる。道から外れていることに幾度も警告がなされたけれども、ついに正されることはなく、『その日』は警告通りにやってきた。

ひょっとしたら、今のこの世界もある日とつぜん……

2023年8月24日　記

奥付

Salamander in the circle
　第二十二章　物質化した太陽光線

2023年8月31日 初版発行
著者　　峯村　明　E-mail　blog　D & R
表紙素材　「月とサカナ」
制作　　Puboo
発行所　　デザインエッグ株式会社